

「自粛」制限「回避」「封鎖」...

新型コロナウイルス感染症の流行で世界の姿が変わりました。最終的に私たちはどんな変化を被るのでしょうか。その結果を失ってしまおうか。そして私たちがここから得るものなどあるのでしょうか？

100年前にも同じ目に遭ったはずだった

1) スペインインフルエンザが世界を襲った人類はちょうど100年前、1918年〜20年に大規模なパンデミックを経験しています。それがスペイン風邪(スペインインフルエンザ)です。

この時の世界人口は20億人、感染者は5億人、死者は2000万から5000万人で、日本をみると人口5600万人のころ感染者が400万人、そして45万人が死亡しています。時はちょうど第一次世界大戦の最中、戦死者1000万人の数がスペインインフルエンザに感染して亡くなり、このために終戦が早まったとも言われています。

2) 日本でも流行した

日本でも1918年(大正7年)の5月〜7月に小さな流行がありました。5月〜7月に小さな流行がありました。5月〜7月に小さな流行がありました。

感染者は前流行の方が多く、死亡率は後流行の方が高く、またそれ以前の流行でかかっていない方が次の流行で感染したようです。死亡者の内訳をみると20代から40代の若中年層で多く、子供も含めて一家全滅という事例もたくさんあったようです。

3) 諏訪も襲われた(当時の新聞より)

当時の新聞は、例えば1918年10月、今でいう「3密」の揃った諏訪地方の製糸工場をスパンインフルエンザ(流行感冒)が襲い、この工場では50人、1000人単位で感染者を出し、11月には岡谷の工場では6人の死亡があったと報じています。

4) 当時の社会の反応と対策

当時の人々の反応はどうか。毎日大勢の死者が出るようになり、劇場・映画館は閉鎖され、あらゆる集まりは禁止され、学校は休校になり、遠足や運動会は中止になり、電車は間引き運転され、郵便配達・電話交換に支障が生まれ、銭湯の客は激減し、人々はマスクを着用し、うがいと人ごみを避けることが推奨され、衣類・寝具は日光消毒され、感染者は隔離、病院は患者で溢れかえりました。温泉地や観光地は訪れる人が激減し観光産業が大打撃を受ける一方で「富山の薬」は売り上げを伸ばしました。



諏訪中央病院 副院長 高木宏明

考察「ビヨンド・コロナ」(上)

寄稿

この災禍をくぐり抜けて私たちは何を獲得していくのか？



スペイン風邪が流行中!!

そして流行は去りました。人々は活動を再開し、100年の間にグローバル化が進みました。仕事や旅行で世界中の人々が行きかうようになり、満員電車での通勤が日常になり、休日や夜に人々が出かける先は「3密」の場所が普通と言つてもいいでしょう。

医師は多忙を極め看護師も不足しました。病院は満杯となり「入院はお断り」というところも出てきました。

2) その後の人類の歩みの結果が「コロナ来襲」直前の生活だった

1) 100年前の流行中の生活 新型コロナウイルス流行で起きていることが100年前にも起きていたことが分かります。当時「口蓋」と言われたマスクが普及しました。新聞にマスクの作り方が紹介されたりしました。

この時代、まだ「ウイルス」というものが発見されておらず、知識はありませんでしたが、咳やくしゃみが病気に関係していることが分かっていたのです。

当時の写真の中には、みなマスクを着けて電車に乗ったり学校に通ったりする光景を映したものがあつた。マスクを着けたまま遊んでいる子供たちの写真もあり、マスクが今と同じように広く利用されたことが分かります。

3) みんな死ぬのが嫌だから... 「このころの感染症」

100年前と今、人々に起きた混乱について、今度は「このころ」の面に少し光を当てて考えてみましょう。

1) 死への恐怖

感染症の流行の際、同じように大混乱に陥るのは、100年前も今も、誰もが死が怖いから



100年前もマスク(口蓋)が高騰!?

100年前と今とでは、情報の拡散の速度とその広がり方が違います。今の方が圧倒的に速く広いために、心の感染も速く広く浸透していくように見えます。

100年前であれば死は身近なものでした。人々の多くは家で息を引き取り、乳幼児の死亡率は高く、医療の力量も今ほどでなく、疫病などのために命を奪われることも多く、目の前で身近な人や近所の人が亡くなることは日常の一部でした。

現代において「死」は100年前に比べると何かベールに包まれた目に見えない恐ろしいものか、それか心の感染症の症状を「重く」している可能性があるのです。

4) 連帯と協働のために このころの感染症は他者との関係を傷つけます。これらの感染症は人々の連帯と協働・共闘を妨げ、負の力しか生みません。私たちの関係をさまさまに侵す病なのです。私たちはこれらこのころの感染症に自覚的に構えつつ、これらの源泉である無知と不安を克服する手立てを考えねばなりません。

現代のインフルエンザと今回の新型コロナウイルス感染症の病気の違いは何か？

4) 新型インフルエンザと病気の違い

1) まず、同じ点 いずれも飛沫感染・接触感染で広がっていきます(新型インフルエンザについては空気感染の可能性についても議論がありますが)。

2) 体の中で起きる悪いことの違い ①インフルエンザ インフルエンザが発症すると、急な高熱や倦怠感、あちこちの痛みなどで苦しめられますが、通常その間は数日で次第に治まってくる

重症化する場合は主に重い気管支炎や肺炎(ウイルスによるもの、細菌感染の合併によるもの)や、脳炎を起したり、あるいは感染により持病が悪化したりして中には亡くなる方も出てきます。

2) 新型インフルエンザ 新型インフルエンザも肺炎をよく起こしますが、自覚症状に乏しく、知らない間に進行してしまふことがよくあるようです。そしてその進行のしくみとして、コロナウイルスによる直接の炎症に加えて、それに対抗しようとした人体の側の免疫が暴走してしまふ(サイトカインストーム)と言います。場合によってはウイルスは減った、あるいはいないのに免疫の暴走による攻撃が体内で続いてそれによる炎症が肺のみならず体中の臓器をダメにしてしまふというしくみが考えられています。

3) どんな方がどれくらい亡くなるのか ①インフルエンザ 現代のインフルエンザではどちらかというと高齢者、それから一部子供さんたちを中心に日本では年間3000人(1万人というデータもあります)の方が亡くなっています。

5) 有効薬とワクチンの開発とその結果... 「コロナ制御時代」 1) 新型インフルエンザの今後 ウイルスははとも変異(遺伝子の変化)が起きて性質が変わることが起きやすく、新型インフルエンザも現在流行しながら世界のあちこちで変異を起し続けており、その結果特徴が変わってくる可能性があります。

2) 有効な治療薬とワクチンの開発 しかしいずれ人類はこの新型インフルエンザに有効な治療薬とワクチンを手に入れる時がくると考えられます。

その時が来た以降をここでは「コロナ制御時代」と呼びたいと思います。次回からはこの「コロナ制御時代」に思いを馳せてみましょう。